

総力戦体制下の雑誌『保育』における「母親教育」記事 ——創刊当初の「家庭保育 ちごちご草」欄を中心に——

浅野 俊和*

Statements on Education for Mothers in a Monthly Magazine “*Hoiku*” during the Second Sino-Japanese War: A Series of Articles Titled “*Chigo Chigo Gusa*”

ASANO Toshikazu

要 約

本稿は、「全日本保育聯盟」結成と『保育』誌創刊に関する事情を押さえた上で、初期に特設されていた「家庭保育 ちごちご草」欄を取りあげ、その母親教育の内容を検討するものである。同欄の特徴は、次の3点にまとめることができる。第1に、別冊子の綴り込みで欄を設け、そこに折り込み附録も加えることで、他誌との差別化を図っていた点である。第2は、「収冊」によって母親向け特設ページをつくったものの、しばらくして欄を解消して保姆・母親向けの「混然融合」の誌面へと転換した経緯には、幼稚園や託児所と家庭がお互いに必要なものを知ることで、両者の理解・協力を促そうとの企図もあった点である。第3は、西村眞琴の「親と子の理科（親子理科）」を連載し、母親に対して自然科学的な啓蒙を行うことで、家庭における理科教育を推進しようとした点である。

キーワード：『保育』、全日本保育聯盟、西村眞琴

はじめに

1937（昭和12）年4月創刊、1945（昭和20）年2月終刊という、総力戦体制と歩んだ雑誌『保育』（「全日本保育聯盟」編輯・発行）は¹⁾、『幼児の教育』と並ぶ保育雑誌の1つに数えられるものの、それが幼稚園保姆を主たる対象にしたのとは異なり、多彩な記事で保育関係者のみならず保健・社会事業関係者や母親も含む幅広い読者を獲得し、「育児報国」への取り組みを大々的に展開した²⁾。表紙で「お母さんと先生の雑誌」と掲げたことが象徴するように、同誌は、母親向けの論稿や記事などの掲載を積極的に行い、その教育にも力を入れた編輯がなされてい

たのである。

『保育』誌では、母親向け特設ページが2度にわたってつくられている。第4号（1937年7月号）から第8号（同年11月号）まで設けられた「家庭保育 ちごちご草」欄、何度かの断絶を挟みながら第42号（1940年10月号）から第71号（1943年3月号）まで目次上で括られていた「母のページ」枠が、それである。本稿では、「全日本保育聯盟」結成と同誌創刊に関する事情を押さえた上で、初期に特設されていた「家庭保育 ちごちご草」欄を取りあげ、その内容・構成を検討する。「母のページ」枠については、紙幅の都合などから稿を改めて迫りたい。『保育』誌の内容は、創刊の「当初から、国策協力の姿勢が明確で、戦時体制の進行につれて誌面全般に戦時色が濃くなってい」っており、「同

* 中部大学現代教育学部幼児教育学科

じ時期の『幼児の教育』も同様であるが、本誌の場合はそれがより強烈であり、戦時中の保育というものの特徴をより明確に教えてくれる」とされる³⁾。他日を期した別稿と本稿により、そうした同誌における母親教育の立場の変化も浮かびあがるであろう。

なお、同時期の保育雑誌における母親向け特設ページとしては、前述した『幼児の教育』誌の1940(昭和15)年1月号(第40巻第1号)から1943(昭和18)年10月号(第43巻第10号)までの毎号に欠かさず掲載され、抜き刷りも別途発行されていた月刊「幼児の母」欄がある。同欄では、東京女子高等師範学校附属幼稚園主事及び「日本幼稚園協会」主幹を務めていた倉橋惣三による主導のもと、1)園児や未就園児の家庭に幼稚園教育への理解を求め、その存在意義を強く訴えたこと、2)「賢母」像をくり返し説き、幼稚園保姆を見習えと強調したこと、3)よい躰や心身の鍛練、栄養管理などの具体的方法を示し、幼児期における「錬成」の意義を説いたことなどの面から、当時の政策要求に応え、保育界の模範にもなるような「母親教育」の論調が形づくられていた。本稿は、そうした『幼児の教育』誌の月刊「幼児の母」欄を取りあげ、その内容の検討を試みた拙稿に続くものとなる⁴⁾。

I. 「全日本保育聯盟」の結成と雑誌『保育』の創刊

雑誌『保育』を編輯・発行していた「全日本保育聯盟」は、1936(昭和11)年6月2日、「大阪毎日新聞社会事業団」(現在の「公益財団法人毎日新聞大阪社会事業団」)を母体に結成された。同事業団は、新聞社が組織した法人としてはわが国で最も古く、1910(明治43)年12月に大阪毎日新聞が発行1万号を迎えた記念事業の一環で、翌1911(明治44)年10月26日に創設された「大阪毎日新聞慈善団」が前身となる。大阪毎日新聞慈善団が創設時に着手した事業は困窮者を無料で診療する巡回病院(於・大阪市南区の願泉寺)であり、以後、「時勢に応じ、その仕事の種類、形態や内容も変化し、豊富となり、世論の支持を得て、国内的にも国際的にも発展して」いったという⁵⁾。そうした事業の一端として、大阪毎日新聞社会事業団は、早い段階から児

童保護や母性保護、育児支援、幼児保育などに取り組んでおり⁶⁾、松尾純雄編『毎日新聞大阪社会事業団五十年史』(財団法人毎日新聞大阪社会事業団、1961年)の記述からは、次のような事業を行っていたことがわかる⁷⁾。

◎母性保護事業

- ・無料助産 1914(大正3)年から1943(昭和18)年まで
- ・「健げな母親」表彰 1934(昭和9)年から1942(昭和17)年まで
- ・赤ちゃん健康審査会 1933(昭和8)年から1944(昭和19)年まで

◎児童保護事業

- ・浜寺の遊浴会 1914(大正3)年から1934(昭和9)年まで
- ・サンマー・ハウス招待 1918(大正7)年
- ・移動プール 1933(昭和8)年
- ・児童健康相談 1925(大正14)年から1934(昭和9)年まで
- ・巡回児童健康相談所 1932(昭和7)年から1933(昭和8)年まで

◎隣保事業

- ・小児保健所 1931(昭和6)年から1936(昭和11)年まで
- ・子供と婦人のセツルメント 1932(昭和7)年から1936(昭和11)年まで
- ・保育学園 1933(昭和8)年から1936(昭和11)年まで
- ・コドモ・セツルメント 1932(昭和7)年

大阪毎日新聞社第5代社長の本山彦一が着手し、その広がりを見せた社会事業は、1936年1月に第6代社長となった奥村信太郎へ引き継がれ⁸⁾、元北海道帝国大学教授(植物学者)で同社社会事業団幹事の西村真琴によるリーダーシップの下、保育分野に特化した新たな事業として「全日本保育聯盟」を生み出した⁹⁾。1930年代半ばは、総力戦体制の構築に向けて「人的資源」の確保が緊急のものとされ、育児や保育が注目を浴び、保育界も国恩に報いんと活気づいており、聯盟の創設は、そうした「時勢に応じ」る形で更なる事業展開を図ったものと見なすことができる。

しかし、そのような時代状況下の1936年6月2日

に、「全日本保育聯盟」は結成されているものの、そこに至るまでの経緯について、史料が乏しく、詳しいことはわかっていない。ただ、結成式の模様に関しては、翌日、『大阪毎日新聞』の記事にもされていた。それは、次のようなものである¹⁰⁾。

『全日本保育聯盟』 本社で盛んな結成式

“国民将来の強健は幼児の保育から”と本社社会事業団が主となつて「全日本保育聯盟」結成を提唱し、託児所、保育園および幼稚園その他の幼児保育機関の健全な発達を期し、全国に呼びかけるため〔六月〕二日午後二時から本社大講堂でその結成総会ならびに結成式を挙行政した、大阪市保育会の六十七団体をはじめ府市の託児所、幼稚園、保育園など二百余団体の代表者、職員、保母ら八百余名出席

濱中與四郎氏司会となつて総会に入り満場一致で本社社会事業団常務理事西村眞琴博士を座長に推し経過報告、規約決議などののち副総裁に奥村〔信太郎〕本社社会事業団理事長、同理事長に西村博士を推し一たん休憩ののち結成式を挙行政

西村新任理事長の挨拶、内務、文部両大臣の祝電の披露、大阪府知事、大阪市長の祝辞（代読）があり閉式、上山〔善治〕弘済会長の講演、会員大道てる、古田誠一郎、富田榮子三氏の所感発表、本社提供のニュース映画を鑑賞五時すぎ終了したなほ当日の参会者全部に本社社会事業団からわが国最初の幼児保育家、小子部連螺贏の育児の図、中山太陽堂、ネスル・アングロスイス練乳会社からのお土産を寄贈、また大阪東区小橋西之町松永定一氏は同聯盟の主旨に賛成金三千円を寄附して関係者を感激させた

ここから、「全日本保育聯盟」が、各種保育団体のみならず、大阪毎日新聞社が持つネットワークも最大限に駆使し、行政機関や企業の協賛を得て結成されたことがわかる。なお、上掲の記事は、「大阪社会事業聯盟」の機関誌『社会事業研究』にも、次のような形で主要部分が転載されている¹¹⁾。

▼…全日本保育聯盟結成式

託児所、保育園および幼稚園その他の幼児保育機関の健全な発達を期して生れた、全日本保育聯盟結成総会並結成式はさる六月二日午後二時から大阪毎日新聞大講堂で挙行政された。大阪市保育会の六十七団体をはじめ府市の託児所、幼稚園、保育園など二百余団体の代表者、職員、保母ら八百余名出席、濱中與四郎氏司会となつて総会に入り満場一致で社会事業団常務理事西村眞琴氏を座長に推し経過報告、規約決議などののち副総裁に奥村〔信太郎〕大毎社会事業団理事長、同理事長に西村氏を推し一たん休憩ののち結成式を挙行政、西村新任理事長の挨拶〔、〕内務、文部両大臣の祝電の披露、大阪府知事、大阪市長の祝辞（代読）があり閉式、上山〔善治〕弘済会長の講演、会員大道てる、古田誠一郎、富田榮子三氏の所感発表あり後一同ニュース映画を鑑賞して五時すぎ終了した〔。〕

結成式後の総会で決議された規約とは、どのような内容のものであったのだろうか。後に機関誌として創刊された『保育』では、次のような「全日本保育聯盟規約」が掲載されており、ほぼ同じものであったと考えられる¹²⁾。

全日本保育聯盟規約

第一条 本聯盟を全日本保育聯盟と称す。

第二条 本聯盟の目的は託児所、保育園及び幼稚園その他のに於ける幼児保育の健全なる発達を期し、以て理想的第二国民建設の礎石をおくにある。

第三条 本聯盟の本部を大阪毎日新聞社会事業団に置く。

第四条 本聯盟の目的を達成せんがために左の事業を行ふ。

一、保育事業に対する功労者の表彰

一、各地保育会並に其他保育事業団体との聯絡交渉。

一、保育に関する研究調査並にその助成

- 一、講演会、講習会、研究会等の開催
- 一、家庭に対する保育思想の普及
- 一、図書、雑誌の編輯発行
- 一、その他必要なる事業

第五条 本聯盟は第四条遂行のため左の部門を置く。

第一部 託児所、保育園及びこれに類するものを取扱ふ。

第二部 幼稚園を取扱ふ。

第六条 本聯盟は託児所、保育園、幼稚園その他各種保育事業団体並に該職員関係者を以て組織す。

第七条 本聯盟に左の役員を置く。

- 一、総裁 一名
- 一、副総裁 一名
- 一、理事長 一名
- 一、理事 若干名
- 一、幹事 若干名
- 一、総主事 一名

副総裁は大阪毎日新聞社会事業団理事長の職にあるものを推戴す。

理事長は大阪毎日新聞社会事業団常務理事の職にあるものを推薦す。

理事及び幹事は理事長これを依嘱す。

総主事は理事長これを任命す。

理事及幹事の任期は貳ケ年とす。

第八条 本聯盟は必要に応じ役員会及び会員総会を開催す。

第九条 本聯盟は各地に支部を設置し、その適当なる役員を依嘱す。

附規

本聯盟に必要な施行細則は別に之を定む。

この規約では、「本聯盟の目的は託児所、保育園及び幼稚園その他に於ける幼児保育の健全なる発達を期し、以て理想的第二国民建設の礎石をおくにある」とある。より具体的には、どのようなことをめざしていたのか。それについて、総会で同聯盟理事長に就任した西村真琴は、当時、次のように述べていた。

「近年国家の壮丁の体格が、頓に低下しつゝ、ある

事實は、一日もゆるがせにすることが出来ない、こゝに基本的改造に向つて、盡力するため、先づ乳幼児期において、合理的に保育を目ざして幼児保護施設機関たる幼稚園、託児所その他の保育事業の、使命が重大となつて来る。現時農村における託児所はその数万以上の多数を占めてゐて、これ等しく国民保健の強化に根柢をおくが故に、本団〔大阪毎日新聞社会事業団〕は幼稚園関係者、託児所関係者の協力の上に、大に時宜に適へる保育国策の実現を策し、こゝに『全日本保育聯盟』を提唱した。」¹³⁾

また、この西村の言葉は、後に「全日本保育聯盟の使命」という形でも示されている。それは、次のようなものである¹⁴⁾。

全日本保育聯盟の使命

近年国家の壮丁の体格が頓に低下しつゝ、あるといふ由々しき事實は、一日もゆるがせにすることの出来ない国策上きはめて重大な問題であります。斯の如き国民体位の欠陥を根本的に改革すると共に、幼き精神の萌芽を強く、正しい方向に培ひ成長せしめ、心身共に強健なる理想的第二国民を養成するには人間一生の土台を構成するところの乳幼児期における合理的保育が最も大切であります。

こゝに全日本保育聯盟は——幼稚園託児所保育園及び家庭に於ける幼児保育の健全なる発達を期し、以て理想的第二国民の建設の礎石を置くために生れたものであります。

昭和十一年六月二日大阪府下幼稚園託児所保育園の保姆職員約六百名出席の下に大阪毎日新聞社会事業団内に結成〔、〕同年十一月東京支部を東京日日新聞社会事業団内に設置。

聯盟は廣橋規子夫人（梨本宮家から後降嫁）を総裁に戴き、全国の幼稚園託児所関係者と共に保育報国を念願として歩んで参つたのでありましてその間本聯盟会員数は全国的に進展して八千有余名に上つてゐます。

次代の人的資源を尊重し、有力ならしめねばならない秋、聯盟の使命を満天下の識者に訴へる次第であります。

「全日本保育聯盟」総裁の要職は、引用文中で述

べられているように、梨本宮守正王の元第二王女である廣橋規子（内務官僚・廣橋真光の妻）が務めた。そして、副総裁と理事長には、前掲の「全日本保育聯盟結成式」の記事で書かれていたように、それぞれ奥村信太郎と西村眞琴が就任している。

また、総主事には、スベン・ロ克蘭ツ『幼児身体保育の実際』（同文館、1934年）の訳者で僧侶・幼稚園経営者の安間公観が就く形で、その組織を整えられている（1938（昭和13）年5月発行の第13号までは、雑誌『保育』の編集人・発行人（編集長）も担った）。さらに、大阪毎日新聞社・大阪毎日新聞社会事業団が持つ人脈を積極的に生かし、文部省をはじめとして、東京や大阪・京都・兵庫（神戸）、名古屋の学務部課長・社会部課長の他、倉橋惣三（東京女子高等師範学校教授）や森川正雄（奈良女子高等師範学校教授）、久留島武彦（早蕨幼稚園長）、久保良英（広島文理科大学教授）、生江孝之（日本女子大学教授）、三田谷啓（医学博士）、吉岡彌生（東京女子医学専門学校長）ら、保育・幼児教育関連分野の著名な学者・実践者を理事に招き、「全日本保育聯盟」は全国組織としての基盤も築いていく¹⁵⁾。なお、東京への進出については、次の記事に見られるように、大阪毎日新聞社会事業団の姉妹団体である東京日日新聞社会事業団（1922（大正11）年11月11日、東京日日新聞社内大阪毎日新聞慈善団東京支部として発足し、1931（昭和6）年に大阪毎日新聞慈善団20周年記念を期して財団法人東京日日新聞社会事業団として独立した）の協力を得ている¹⁶⁾。

□全日本保育聯盟東京第一回総会

昨夏大阪に於て誕生を見たる全日本保育聯盟東京第一回総会が去る一月廿三日午後二時より東京日日新聞社講堂に於て、全日本保育聯盟並に東京日日新聞社会事業団の共同にて主催され、非常な盛会であつた、因に当日のプログラムは左の如くであつた。

一、挨拶 全日本保育聯盟理事長 理学博士 西村眞琴氏
一、講演 慶應大学教授 文学博士 小林澄兄氏
一、余興 映画

「全日本保育聯盟」は、前掲した規約の第4条にある「図書、雑誌の編輯発行」事業へと着手し、1937年4月、機関誌『保育』を創刊する。その趣意に関して、「創刊の辞」は同号に掲載されていないけれど、「あとがき」には、次のような文章を見ることができる。

「未だわが国には幼児保育に関する雑誌が非常に尠く、皆様の御要望にその切なるものがありましたがこの度、全国の保育会、託児所等諸団体との連絡交渉を図り協力、提携して保育事業の向上発展に資するため本聯盟は月刊雑誌『保育』を発刊することになりました。／最近国民の保健運動とともに幼児保育に対する関心が国家的にもたれてゐます折柄非常に意義あること、存じます。」¹⁷⁾

『保育』誌は、奥付・表紙の記載によれば、創刊号から第8号までは、前月の25日に「印刷納本」、当月1日に「発行」となっている。しかし、第9号（1937年12月号）以降では、それぞれ当月10日と15日に変更された。発行所については、創刊号から第40号（1940年8月号）までが「全日本保育聯盟」で、第41号（同年9月号）から第78号（1943年10月）までは「保育発行所」となり、第79号（同年11月号）以降は再び「全日本保育聯盟」に戻る。創刊時の誌代は1部20銭（郵税共）であり、1938年12月発行の第20号からは25銭に引きあげられた。判型は菊判（ほぼA5版に相当する大きさ）であり、ページ数（口絵写真や目次を除く）に関しては毎号かなり変動が見られる。

雑誌『保育』は、その当時、保育関係者の中でのように見られていたのか。創刊1年2ヵ月後、「保育問題研究会」会員の浦辺史は、次のように記している¹⁸⁾。

「保育」月刊（一部二十銭）

大毎社会事業団内全日本保育聯盟機関誌で昭和十二年四月創刊、対象は母と保姆らしく振仮名付で母のための保育常識あり、子を歌つた短歌民謡あり、保姆のための保育材料あり、雑然と保育関係の記事を満載してゐる。保育雑誌界の文藝春秋。

浦辺がどういった趣旨で「保育雑誌界の文藝春秋」と評したかは定かでないけれど、それを『保育』誌の編集部は好意的に受け取ったようである。同誌の編輯後記には、次のように記されている¹⁹⁾。

御蔭をもつて、本誌は次第に進境を示して居り、計らずも本誌に対し東京の僚誌「保育問題研究」六月号誌上で、

「保育」は保育雑誌界の文藝春秋と激賞されました。現在我国に於いて月々発行される雑誌が一万数千種にのぼるなかで、創刊一箇年半に満たない本誌をかくも高く評価されるに至った以上は、我々編輯にたづさわるもの、御愛読の皆様の御期待に愈々そひ、保育事業に於ける教養と啓蒙のため益々努力いたしたく存じます。

『保育』誌の誌面については、「表紙絵および口絵をはじめ、巻頭言は毎号西村〔眞琴〕自身が担当し、独自の保育思想を展開して」おり、「西村をはじめ、倉橋惣三、長田新、久保良英、三田谷啓など、保育、教育、医学、社会事業の各界の指導者たちが保育に関する論稿を発表し、保育界のニュースや統計なども加え、豊富な内容になってい」た²⁰⁾。確かに、「毎号掲載される西村の博識を示し且つ平易な読みものを初め、専門的論文やら、すぐに役立つ実用記事やらと変化に富んでおり相当多くの読者を持っていたことが想像される」ものだと言える²¹⁾。

しかし、硬軟取り混ぜた論稿や記事で多彩な誌面づくりを行い、多くの読者を獲得したとはいえ、その内容的なレベルは必ずしも低くなく、しかも月々20銭の誌代で購読していたという点からすれば、同誌を手にとった社会階層は限られていたと考えられる。主な読者であった保姆は別として、もう一方の読者となる母親については、掲載された百貨店や化粧品等の広告及び記事の内容など、生活水準や生活様式を指し示すものから判断して、都市中間層が対象になる誌面であったと見なされよう。

Ⅱ. 「家庭保育 ちごちご草」欄に見る母親教育

創刊当初から多彩な誌面を構成していた雑誌『保育』で、その初期に、母親教育の役割を担っていたのが、「家庭保育 ちごちご草」欄である。同欄は、もともと、『保育』誌の創刊号と時を同じくして発刊された別冊子（リーフレット）を起源とする。それについては、創刊号の巻末に記された「あとがき」で、次のように述べられている。

「……『保育』の別働隊として家庭保育『ちごちご草』も併せて発刊いたしました。私たちはこの二つの芽ぐむものに対し懸命の努力を捧げる覚悟です。いづれに対してもみなさまの力強い御支援を願つてやみません。」²²⁾

別冊子「家庭保育 ちごちご草」とは、どのようなものであったのか。その点について、現物は未確認だけれど、『保育』第2号（1937年5月号）の「雑報」では、次のように広報がなされている²³⁾。

家庭保育 “ちごちご草”

代価 毎号美麗附録付／一部 金五銭
幼稚園の皆様に対しては三銭に割引致します。
本聯盟は本誌創刊号にお知らせ申しました如く、家庭に対する保育思想普及を目的として「ちごちご草」なるリーフレットを発刊致して居ります。次号の第五月号は紙面を一新し、読み安く、また附録も、こども達のよろこぶやうにいたし、そして毎号その趣向を変へてお目見えいたしますから、どうぞ御希望の方はお申込み下さいませ。見本御入用の節はお送り申し上げます。

このリーフレットは、本誌とともに多くの読者を獲得したようであり、『保育』第2号の「あとがき」には、「創刊号は大へんな好評を得て、“保育”の別働隊“ちごちご草”と共に続々購読申込をうけましたので、大いに意を強うし、意気込んでゐます」との記述が見られる²⁴⁾。また、同誌第3号（1937年6月）の「あとがき」でも、次のように言及されている。

「……ちごちご草第二号は内容と共に附録の素晴らしさで飛ぶやうに出て了ひました。まだ御

覧になつてゐないかたは是非御一読を御すゝめ
します。見本は五銭御送附下さい。」²⁵⁾

こうして「好評を得」た「家庭保育 ちごちご草」
は、『保育』誌の第4号から綴じ込み附録として合
冊されることになり、表紙でもそれが謳われた。そ
の経緯については、同号の「雑報」において、次の
ように報告されている²⁶⁾。

“ちごちご草”とその附録 本誌に収冊

保育の別働隊として活躍して居りました家庭保
育“ちごちご草”は単に家庭のお母さま方に読ん
で頂くばかりでなく更に保育専門家のみなさまの
御参考にも供したく、本号より本誌の一部に収録
することに致しました。従つて、母体の“保育”
そのものも御家庭にも読んで頂くことになり大い
に得るところあると信じます。従つて、これまで
御子さまがたによろこばれてゐました“ちごちご
草”附録は、本誌の別附録として添附致します。
この際、わが“保育”を広く各家庭に送り込むこ
とに、皆さまの御盡力を御願ひ致します。

ここには、「単に家庭のお母さま方に読んで頂く
ばかりでなく更に保育専門家のみなさまの御参考に
も供したく」と、「収冊」の理由が説明されている。
また、両者の合冊への希望も高かったらしく、同号
巻末に掲載された無題の編輯後記では、次のような
記述を見ることができる。

「……わが“保育”の別働隊^(ママ)として発行して
居りました“家庭保育ちごちご草”は本号より
附録として収録することになりましたことを
お知らせいたします。これは各方面よりの御希望
が多かつたゝめ合冊断行の挙に出たのです。／
このため園側と家庭側とが結びつけられ一層
“保育”本来の使命に邁進することが出来るで
せう。従来、ちごちご草に附録として居りまし
た美麗色刷手技は、そのまゝ“保育”に添附い
たし御期待にそむかざるやう努めます。本号の
ものは栗津〔實〕先生御考案になる当代の人気
者双葉山玉錦の角力人形です。／〔中略〕／附
録“ちごちご草”には家庭理科として西村〔眞
琴〕博士に毎号文と絵とを御願ひすることにい

たしました。本号は『つばさのない鳥さん虫さ
ん』です。藤原〔九十郎〕博士は『子供の栄養』
について、西阪〔保治〕先生は『幼児の宗教心』
についてそれぞれ玉稿をよせて下さいまし
た。その他のものもお母さん方にためになるも
のばかりです。／園側も家庭側も各々その向ふ
ところは幼児の生活を如何に健全に指導し、如
何によく育てるかにあります。そのためには愛
児をもつ親御さん方は専門家のページにも目を
とめ、大切な愛児を預る側でも家庭保育のペー
ジに心を用ゐて頂きたく存じます。」²⁷⁾

「収冊」後における「家庭保育ちごちご草」の内
容は、どのようなものであったのか。それは、聯盟
理事長の西村眞琴の絵・文による扉ではじまり、先
ほどの引用文でも触れられているように、西村の
「親と子の理科（親子理科）」を連載し、保健・栄養
関係の読み物や躰・遊び関係の記事の他、俳句・短
歌・詩歌、子ども向けの童話・童謡などが並ぶ構成
であった。なお、はじめて合冊された第4号の目次
は、次のようなものである。

家庭保育 ちごちご草

親子理科	つばさのない鳥さん虫さん	西村眞琴
子供の栄養		藤原九十郎
入園の吾子		谷口照子
幼児の宗教心		西阪保治
牛の嫁入		豊田次雄
▽俳句		▽家庭保育手帳
▽育児いろは訓		▽子供を強く育てるには？
▽幼児に与ふべき玩具		

この第4号では、扉を含めて全7ページで構成さ
れている。しかし、それ以降、第5号（1937年8月
号）が全13ページ、第6号（同年9月号）と第7号
（同年10月号）が全17ページ、第8号が31ページと
増え、掲載される読み物や記事も多彩になっていっ
た。執筆者については、西村や上村善治といった聯
盟関係者、齋藤善太郎や甲斐久子、梯明秀、波多野
完治、波多野勤子ら女学校・大学教員、膳眞規子や
松本春枝ら幼稚園関係者、葛原しげるや古村徹三ら
作家・詩人と多様な顔ぶれが並び、軍人の松崎伊織

も原稿を寄せている。編集部執筆による「家庭保育手帳」は保健記事を中心としたものであり、第6号以降は医師による論稿や無題のコラムなどへと解消した。また、前述した引用文中でも書かれていた通り、折り込み附録の「美麗色刷手技」が「収冊」後にも引き継がれ、「夏むきのもので御子さま方にうけることうけあひ」だという「栗津〔實〕先生御考案のモーターボート」などが毎号で色を添えた²⁸⁾。

こうした誌面づくりの方針は、どのようなものであったのか。それは、次のような「原稿募集」記事からうかがい知ることができよう²⁹⁾。

原稿募集

保育に関する研究と創作その他諸種の原稿を募集致します。どうぞ会員諸兄姉の御寄稿をお願い申し上げます。

〔中略〕

〔ちごちご草の部〕

- ▽幼稚園から家庭へ望まれることがら
- ▽家庭保育上のいろいろな注意
- ▽幼児指導上親達に参考となること
- ▽家庭における園児に対する思ひつき
- ▽幼児に関する短歌

第6号の「後記」では、「家庭保育“ちごちご草”はお母様方に好評を博してゐます」し、「内容は多彩に涉つてゐますが、皆好読物と思ひます」と述べ、それが読者である母親に好意的な形で受け入れられていることを強調している³⁰⁾。また、第7号の同欄でも、「毎号、園と家庭へお送り申上げております本誌独特の『家庭保育ちごちご草』もこのフレーベル特輯号にふさわしく諸先生の御執筆により充実いたしてゐる事を自負するものであります」と記されており、編集に力が入れていることを窺わせた³¹⁾。その熱意は、次のような第8号の編輯後記にも表れている。

「北支戦線、上海戦線、いづれもが戦捷に戦捷をついで居ります。可憐なるわれらがあとをつぐ園児たちも日の丸を高く掲げて万歳を叫びつゞけてゐます。頼もしくもあり嬉しくもあり、それにつけても保育事業の如何に重大性を

おびてゐるかに考へを及ぼしますときちつとしてゐる訳には参りません。／保姆さんもお母さんも力を一にして将来の忠勇無比な兵隊さん、あるひは銃後を守る国防婦人をつくり上げるため懸命に見守るべきであります。／重大事局に当面して私達は一層自らを鞭撻育兒的訓練をうくべきでありませう。この秋本聯盟、大阪毎日新聞社会事業団共同主催のもとに『全日本保育大会』を開催するはうべなるかなと言ふべきであります。／また本誌内容ことごとくが保姆諸先生方、家庭のお母さま方の、育兒について水も漏さぬ陣を張り、またとない指針として巻を重ねてゐますことを自負し、一層の御愛読をお勧めする次第であります。／保姆諸先生方よ！読んで下さい。お母さまよ読んで下さい。そしてあなたの預る幼児を、あなたの宝、愛兒をよりよく教へ、よりよく育て、よりよく伸ばして下さい。』³²⁾

しかし、「家庭保育 ちごちご草」は、そうした第8号を以て掲載が突然に終わられることとなる。その経緯については、第9号の「編輯の窓」で、次のように記されているのみである。

「今年の仕事の仕おさめとして家庭保育『ちごちご草』はその題字を抹消して“保育”全体となし第二国民を保育する上に大切な諸先生の御意見などを読んで頂くことにしました。お母さまの立場も、保姆先生の立場も結局は愛する小国民のためであります。お母さま方のよみものも保姆先生方のよみものも混然融合各々糧になることうたがひありません。それに内容の一部には振仮名をつけることも決行いたしました。共に喜んで頂けると存じます。』³³⁾

第9号以降は、ここでも記されているように、あえてページごとでは読者を特化せず、「お母さま方のよみものも保姆先生方のよみものも混然融合各々糧になる」形の誌面へと変更された。しかし、西村眞琴による「親子理科」の連載をはじめとして、綴じ込み附録「家庭保育 ちごちご草」で見られたような種類の論稿や記事自体は姿を消していない。そして、1938年4月発行の第12号からは表紙のデザインも一新され、「お母さんと先生の雑誌」と謳われるようになる。こうした編輯方針と誌面構成の

変更について、創刊1年を迎えた第12号の「編輯の窓」では、次のような自己評価がなされている。

「思へば、まことに紆余曲折絶へず『成長のための困難』を克服して、微力ながら撓まざる精進をつゞけて来ました。偏狭で親しみがたいものを避けて振仮名をつけ、出来るだけ具体的、実質的なものを多く盛るやうにし、『有意義で多彩』を期して歩んで参りました。やうやく“これが出発点だ”と云ふ地点に辿りついたかのやうに思はれます。」³⁴⁾

また、同稿には、「本誌の編輯スタッフを強化するため、〔一九三八年〕二月末、指導者、實際家をもつて編輯委員会を設け、将来に対する発展契機といたしました」し、「該委員会の成果は、直ちに本誌に大久保〔直穆〕、眞先〔香苗〕、栗津〔實〕、檜垣〔逸代〕の四氏の玉稿となつて、反映して居ります」ともある³⁵⁾。当該の第12号には、大久保「子供服について」や眞先香苗「家庭略画講座（一）」、栗津實「薄紙手技に就いて」、檜垣逸代「ピクニックのお弁当」などが並んでおり、そこから「家庭保育」重視の路線をより一層強化したことが窺い知れる。その点については、続く第13号の「編輯の窓」において、次のように述べられている。

「本誌は他に先んじて家庭保育に重点を置き、幼稚園保育・託児所保育との関係把握を志し、全く新らしき局面を切り開いて参りました。我々の編輯方針につき初めは御了解願へず奇怪に思はれる向きもありましたが、やうやく政府要路その他の方面より家庭の母に呼びかける声が熾になり、僚誌で我々の驥尾に附されるもの一、二に止まらず、本誌にいさゝか先賢^(ママ)の明ありと自負し、自ら鞭達^(ママ)する次第であります。」³⁶⁾

ところで、1930（昭和5）年12月23日に「家庭教育振興ニ関スル件」（文部省訓令第18号）が発せられて以降、家庭教育振興政策の実施が徐々に進められ、1930年代半ばには、大日本連合婦人会の組織化や文部省主催による家庭教育指導者講習会などを通して全国的規模で実践網も形成されつつあった。そうした動きの中心的人物の1人が倉橋惣三であったことから、もともと母親への関わりがなされてきていた保育界もその動向に呼応する姿勢を示している。「支那事変を契機として家庭生活の破綻が

子供の養育を不十分にしている事が国家的重要問題になり家庭教育振興があらゆる方面で切に要望されてゐる」中にあって、「幼稚園や託児所が限られた時間幼児を保育するのみに止まらず日常の保育活動をとほして家庭教育を改善、強化するといふ社会教育的機能をより充実する必要も亦こゝにある」との認識が、保育関係者の間にも急速な広がりを見せはじめたのである³⁷⁾。そして、『保育』誌が上記の主張を示した半年後の1938年12月には、教育審議会答申「国民学校、師範学校及幼稚園ニ関スル件」の「幼稚園ニ関スル要綱」第4項で、「幼稚園ト家庭トノ関係ヲ一層緊密ナラシムルト共ニ之ニ依リ家庭教育ノ改善ニ裨益セシメ、併セテ幼稚園ノ社会教育的機能ノ發揮ニ力メシムルコト」という改革方針があげられることにもなる。

とはいえ、同誌では、その後しばらく母親向けにページを特設する編輯はなされない。前述したように、「お母さま方のよみものも保姆先生方のよみものも混然融合各々糧になる」との方針による誌面づくりが、3年ほど継続する形となったのである。

一方、その約3年間には、一般の人々に保育の重要性を宣伝するため、「全日本保育聯盟」は保育展覧会などのイベントの開催も積極的に行っていく。そうした催しは、『保育』誌の創刊半年後となる1937年11月13日から15日まで、大阪毎日新聞社会事業団との共催で「全日本保育大会」（於・大阪市）を行った際、2日目のプログラムに「全日本保育大会記念 全大阪母親大会」を組み込んだことが端緒となる。同母親大会については、次のような記録が残されている。

「大会第二日最後のプログラムとして、午後六時より大阪中央公会堂で、全日本保育大会記念全大阪母親大会を挙行、定刻前さしも広い会場も、坊ちゃん嬢ちゃんを連れたお母さんで超満員の盛況、安間〔公観〕大会事務長司会の下に、全日本保育聯盟理事長西村〔眞琴〕博士の開会の辞、廣橋〔規子〕総裁並に全日本保育聯盟顧問・大毎主幹平川清風氏の挨拶〔、〕大阪府知事夫人池田よし子氏、大阪市長夫人坂間操子氏、大阪市聯合婦人会副会長河井やゑ子氏の祝辞があつて、東京女子高等師範学校教授倉橋惣三氏は“母”と題して講演をなし、満堂のお

母さん達を感動させた。ついで十五の舞踏研究所の舞踏があつて同十時、大会第二日の幕を閉じた。」³⁸⁾

その後は、1939（昭和14）年3月1日から7日まで「母子保護法1周年記念 母よ強かれ 育児報国展」（於・大阪梅田阪急百貨店）、翌1940年5月26日から6月2日まで「第二回 紀元二千六百年記念 保育総動員展覧会」（於・宝塚）と展覧会を企画・開催し、雑誌『保育』以外の媒体も用いて、母親への啓発活動を繰り広げていく³⁹⁾。こうした展覧会は、1941（昭和16）年6月26日から7月24日まで開催された「第三回 保育報国展覧会」（於・宝塚）で一区切りとなるけれど、それに先立って『保育』誌では母親向けの特設ページが「母のページ」枠の形で復活することとなる。同枠については、冒頭でも述べたように、稿を改めて検討したい。

おわりに

以上、本稿では、「全日本保育聯盟」結成と『保育』誌創刊に関する事情を押さえた上で、同誌初期に特設されていた「家庭保育 ちごちご草」欄を取りあげ、その状況を追ってみた。最後に、同欄の特徴を整理しておこう。それは、次の3点にまとめることができる。

第1に、別冊子の綴じ込みで欄を設け、そこに折り込み附録も加えることで、他誌との差別化を図っていた点である。『保育』誌は、前述したように、「大阪毎日新聞社会事業団」を母体に結成された「全日本保育聯盟」が編集・発行する月刊雑誌であり、その誌面づくりには新聞社の持つノウハウを利用したところが垣間見える。「家庭保育 ちごちご草」欄に掲載された論稿や記事などの基本的な構成は他誌と大きく変わらないものの、そこへ二重に附録を添えるという宣伝・販売戦略は、まさにマス・メディアの仕掛けを物語るものであったと見なされる。すなわち、別冊子だったものをあえて綴じ込むとともに、親子でつくる紙工作教材の「美麗色刷手技」も附録にするという企画を展開したことは、新奇性や話題性、遊び性、参加性、体験学習性などのイベント的な特徴を積極的に生かして、創刊後の『保育』誌の名を世間に広め、発行部数を伸ばすことにも大

きく貢献したのである。その意味において、「家庭保育 ちごちご草」欄は、単なる「母親教育」記事としてだけでなく、メディアの戦略性に裏づけられたものでもあったと言えるであろう。

第2は、「収冊」によって母親向け特設ページをつくったものの、しばらくして欄を解消して保姆・母親向けの「混然融合」の誌面へと転換した際に、幼稚園や託児所と家庭がお互いに必要なものを知ること、両者の理解・協力を促そうと企図していた点である。こうした点については、前述したように、「園側も家庭側も各々その向ふところは幼児の生活を如何に健全に指導し、如何によく育てるかにあります」し、「そのためには愛児をもつ親御さん方は専門家のページにも目をとめ、大切な愛児を預る側でも家庭保育のページを心に用ゐて頂きたく存じます」と、「収冊」時には述べられている。また、欄の枠組みを外した際には、「お母さまの立場も、保姆先生の立場も結局は愛する小国民のためであります」し、「お母さま方のよみものも保姆先生方のよみものも混然融合各々糧になることをうたがひありません」とも記されていた。そのような『保育』誌の先駆的な試みについては、「他に先んじて家庭保育に重点を置き、幼稚園保育・託児所保育との関係把握を志し、全く新しき局面を切り開いた結果、「僚誌で我々の驥尾に附されるもの一、二に止まらず、本誌にいさゝか先賢の明ありと自負し、自ら鞭達する次第であります」と、欄の解消後に総括されていたことも示している。

第3は、西村眞琴の「親と子の理科（親子理科）」を連載し、母親に対して自然科学的な啓蒙を行うことで、家庭における理科教育を推進しようとした点である。西村による連載は、第4号から第8号まで設けられた「家庭保育 ちごちご草」欄で途切れることがなかった。また、同欄が解消した第9号以降も、何度かの休載はあるものの、他の論稿・記事に混じる形で載せられており、第42号から新設された「母のページ」枠での連載「母子郊外趣味の会」へとつながっていく。こうした連載が設けられた背景には、「全日本保育聯盟」理事長の西村眞琴が、元北海道帝国大学教授の理学博士であったことがある。1927（昭和2）年に大阪毎日新聞社へ入社し、論説委員・学芸部顧問・事業部長を歴任した彼は、科学

ジャーナリストとして、自然科学と大衆を結びつける活動に携わり、啓蒙的な内容のエッセイや子ども向けの科学読み物も様々なところに書いている⁴⁰⁾。そのような活動の一環として、『保育』誌における「親と子の理科（親子理科）」の連載は位置づけられるものであり、それが他の保育雑誌での母親向け特設ページには見られない特色ともなっていた。

〔注〕

- 1) 総力戦体制下の雑誌『保育』や「全日本保育聯盟」、同「聯盟」理事長の西村真琴に関する研究としては、管見によれば、水野浩志「昭和前期の保育会の姿」（日本保育学会『日本幼児保育史（第4巻）』フレーベル館、1971年）、同「昭和前期の全国的保育大会」（同前）、同「西村真琴—全人的能力を保育に投入した驚嘆すべき人物」（岡田正章・宍戸健夫・水野浩志編『保育に生きた人々』風媒社、1971年）、松本園子「〔解題〕『保育』（昭12～19）—全日本保育連盟」（社会事業史文献調査会編『社会事業雑誌目次総覧（別巻）』日本図書センター、1988年）、母袋幸子「西村真琴論（その1）—幼児期」（『頌栄短期大学研究紀要』第21巻、1989年）、荒俣宏「人造人間は微笑する—万能科学者・西村真琴」（同『大東亜科学綺譚』筑摩書房、1991年、ちくま文庫、1996年）、小熊伸一「〔解題〕『保育』（教育ジャーナリズム史研究会編『教育関係雑誌目次集成第Ⅲ期 人間形成と教育編（第33巻）補遺／収録誌一覧／各誌解題／執筆者索引／所蔵機関一覧』日本図書センター、1992年）、母袋幸子「西村真琴論（その2）—真琴の父性観について」（『頌栄短期大学研究紀要』第25巻、1994年）、土井洋一・板原和子「植物学者・西村真琴の思想と実践（その1）—戦時下の保育・社会事業活動を中心に」（『社会問題研究』大阪府立大学、第46巻第1号、1996年12月）、土井洋一「植物学者・西村真琴の思想と実践（その2）—思想の形成とその社会的基盤を中心に」（同前、第46巻第2号、1997年3月）、畑中圭一『地球は人間だけのものではない—エコロジスト西村真琴の生涯』（ゆいぽおと、2008年）、和田真由美「西村真琴の教育思想に関する研究—雑誌『保育』の読み取りから」（『近大姫路大学教育学部紀要』第5号、2012年）、同「自然環境を活用した母親支援のあり方—橋詰良一・西村真琴の思想と実践に着目して」（『関西教育学会年報』第37号、2013年）、田中まさ子「保育における養護—1930年代後半から1940年代前半の雑誌『保育』を手がかりに」（『名古屋学院大学論集（人文・自然科学篇）』第52巻第2号、2016年

- 1月）などがある。しかし、それらでは、『保育』誌や「全日本保育聯盟」が行った母親教育に関する言及などは見られるものの、深く検討されているわけではない。
- 2) 渡邊多恵子編『育児報国展集抄—母よ強かれ！』全日本保育聯盟、1939年。
- 3) 松本「〔解題〕『保育』（昭12～19）」（前掲、p. 386）。
- 4) 拙稿「1940年代前半の保育雑誌における『母親教育』記事—『幼児の教育』誌の月刊『幼児の母』欄を中心に」（『中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要』第17号、2016年）。
- 5) 上野常隆「序」（松尾純雄編『毎日新聞大阪社会事業団五十年史』財団法人毎日新聞大阪社会事業団、1961年）。
- 6) 和田真由美「大阪毎日新聞慈善団の乳幼児保護活動と家庭への支援—無料助産事業と保育学園の創設を中心に」（『姫路大学教育学部紀要』第11号、2018年）。
- 7) 松尾編『毎日新聞大阪社会事業団五十年史』（前掲、pp. 58-101）。
- 8) 高石真五郎とのコンビで毎日新聞全盛期を築きあげた奥村信太郎については、奥村信太郎伝記刊行会編『奥村信太郎—日本近代新聞の先駆者』（奥村信太郎伝記刊行会、1975年）などが詳しい。
- 9) 西村真琴の経歴や思想については、水野「西村真琴」（前掲）、母袋「西村真琴論（その1）」（前掲）、荒俣「人造人間は微笑する」（前掲）、母袋「西村真琴論（その2）」（前掲）、土井・板原「植物学者・西村真琴の思想と実践（その1）」（前掲）、土井「植物学者・西村真琴の思想と実践（その2）」（前掲）、畑中「地球は人間だけのものではない」（前掲）、和田「西村真琴の教育思想に関する研究」（前掲）などを参照のこと。
- 10) 〔無署名〕「『全日本保育聯盟』本社で盛んな結成式」（『大阪毎日新聞』大阪毎日新聞社、1936年6月3日、第11面（〔……〕内は引用者、以下同様））。
- 11) 大阪社会事業聯盟編輯部「大阪社会事業ニュース／社会事業雑報／全日本保育聯盟結成式」（『社会事業研究』大阪社会事業聯盟、第24巻第7号、1936年7月、p. 140）。
- 12) 「全日本保育聯盟規約」（『保育』全日本保育聯盟、第1号、1937年4月、p. 60）。
- 13) 西村真琴「新聞社の社会事業」（『社会事業』財団法人中央社会事業協会社会事業研究所、第20巻第9号、1936年12月、p. 12）。
- 14) 渡邊編『育児報国展集抄』（前掲、p. 92）。
- 15) 「全日本保育聯盟役員」（『保育』第1号、pp. 60-61）。
- 16) 〔無署名〕「聯盟集報／全日本保育聯盟東京第一回総会」

- (『私設社会事業』全日本私設社会事業聯盟、第48号、1937年2月、p. 15)。
- 17) 〔無署名〕「あとがき」(『保育』第1号、p. 63)。
 - 18) 浦辺史「保育関係雑誌目録(一)」(『保育問題研究』保育問題研究会、第2巻第6号、1938年6月、pp. 27-28)。
 - 19) 辻倫夫「編輯室から」(『保育』第16号、1938年8月、p. 148)。
 - 20) 小熊「〔解説〕『保育』」(前掲、p. 55)。
 - 21) 松本「〔解説〕『保育』(昭12～19)」(前掲、p. 386)。
 - 22) 〔無署名〕「あとがき」(『保育』第1号、p. 63)。
 - 23) 〔無署名〕「家庭保育“ちごちご草”」(『保育』第2号、1937年5月、p. 60)。
 - 24) 〔無署名〕「あとがき」(『保育』第2号、p. 61)。
 - 25) 〔無署名〕「あとがき」(『保育』第3号、1937年6月、p. 61)。
 - 26) 〔無署名〕「雑報／“ちごちご草”とその附録 本誌に収冊」(『保育』第4号、1937年7月、p. 54)。
 - 27) 一記者「〔あとがき〕」(『保育』第4号、p. 55)。
 - 28) 一記者「〔あとがき〕」(『保育』第5号、1937年8月、p. 70)。なお、第11号において、「従来毎号附録として添へて居りました手技は、本号より適当な時にのみ御目にかけることゝなりました」と、附録については廃止をされている(T生「編輯の窓」(『保育』第11号、1938年3月、p. 88))。
 - 29) 〔無署名〕「雑報／原稿募集」(『保育』第4号、p. 54)。
 - 30) 一記者「後記」(『保育』第6号、1937年9月、p. 76)。
 - 31) 一記者「後記」(『保育』第7号、1937年10月、p. 112)。
 - 32) N記者「編輯の窓」(『保育』第8号、1937年11月、p. 92)。
 - 33) N「編輯の窓」(『保育』第9号、1937年12月、p. 96)。なお、続く第10号でも、次のように言及されているのみで、詳しい事情は記されていない。「別に出して居りました家庭保育“ちごちご草”は全く本誌に解消し、家庭と保育機関との混然融合につとめることゝなりました。一人でも多く読んでいたゞくため、本号から振仮名をつけました」(T生「編輯の窓」(『保育』第10号、1938年1月、p. 86))。
 - 34) 辻生「編輯の窓」(『保育』第12号、1938年4月、p. 92)。
 - 35) 同上。
 - 36) 辻生「編輯の窓」(『保育』第13号、1938年5月、p. 132)。
 - 37) 第七部会「幼稚園託児所における両親教育の研究手順」(『保育問題研究』第3巻第11〔12〕号、1939年12月、p. 24、同年5月号の休刊もあって、この9月号から12月号までの号数表示に混乱が見られ、「第3巻第8号」が2つ存在し、1号ずつずれて表記もされていたため、〔……〕内に発行月と合致した正しい号数を示した)。
 - 38) 安間公観編『全日本保育大会誌』全日本保育聯盟、1938年、p. 154。
 - 39) 〔無署名〕「母よ強かれ 育児報国展一将来への人的資源に備へて聖戦下の母に呼びかける」(『保育』第24号、1939年4月、pp. 67-80)、編集部「紀元二千六百年記念 保育総動員展覧会」(同前、第38号、1940年6月、pp. 38-41)。
 - 40) 畑中『地球は人間だけのものではない』(前掲)、和田「自然環境を活用した母親支援のあり方」(前掲)参照のこと。

※本稿は、「平成30年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金(基盤研究(C)))」(タイトル:「『総力戦体制』下の保育雑誌に見る女性専門職の〈技術的動員〉—『保育』誌を中心に」、課題番号:18K02501)による研究成果の一部である。

受付日 2019年9月30日

受理日 2019年10月29日

Abstract

This study follows the formation of *Zen-Nihon Hoiku Renmei* (All Japan Federation of Early Childhood Care and Education) and the launch of its bulletin called “*Hoiku*” and examines the statements on education for mothers on a series of articles titled “*Chigo Chigo Gusa*” in a monthly magazine in 1937. An overview of the articles is summarized in the following three points. First, in order to differentiate it from other magazines, “*Hoiku*” bound up paper-made supplements and booklets intended for family and provided special columns for mothers. Secondly, by reading the articles and contents meant for teachers in the magazine, mothers were expected to be aware of early childhood education and be supportive of kindergarten education. Thirdly, the articles written by *Makoto Nishimura* prompted mothers to deepen their understanding of natural science and motivated them to teach science at home.

Keywords: Monthly Magazine “*Hoiku*,” *Zen-Nihon Hoiku Renmei*, *Makoto Nishimura*